

学内広報

2025.12.19

no.1601



「Tokyo Forum 2025」より（11月21日）



記念式典・講演会を安田講堂で開催

地震研究所100周年!

創立150周年記念事業

「150人の集い2025」を開催

物理を学ぶ女子学生のためのイベント

「やっぱり物理が好き!」を開催

↓地震研 100周年記念マスコットの「震研鳥」

記念式典・講演会を 同い年の安田講堂で開催

地震研究所 100周年!

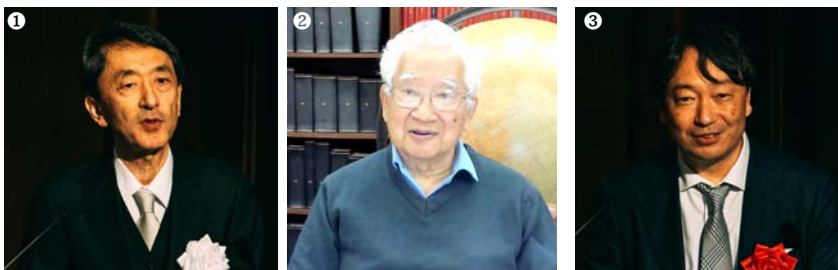
1923年の関東大震災を受け、1925年11月13日に設立された地震研究所。その100周年を記念する式典と講演会が、同じ1925年に竣工した安田講堂を舞台に行われました。現在の研究所長、世界の地震学に長く貢献してきた研究者、そして研究者から転身した直木賞作家は、この大きな節目に何を語ったのでしょうか。その中身の一端を紹介します。

EARTHQUAKE RESEARCH
INSTITUTE

100

YEARS
est. 1925

←地震研究所白木観測点（広島市）で観測された2011年東北地方太平洋沖地震の上下動成分



災害の課題は深刻化している

記念式典ではまず古村孝志所長が登場。地震現象の理解はこの間に大きく進展したが、自然災害は変わらず続いており課題はむしろ深刻化していること、100周年は不変の使命である災害の軽減方策の探究を改めて考える重要な節目であることなどを、開会挨拶として述べました。

次に登壇した藤井輝夫総長は、地震研が地震火山研究の中核拠点として歩んできたこと、学内連携により1000年規模の地震史料データベースを構築し防災・減災に取り組んでいることなどを紹介。次の100年への出発点に立つ地震研とともに大学を改革する決意を語りました。

続いての来賓祝辞は、地震研とともに歩んできた5つの組織の皆様から。文部科学省、内閣府、気象庁のお三方の言葉では、火山地震研究と地球物理学の中核としての活動が防災・減災計画を策定する際の重要な知見となること、地震研による地震計の開発と設置が観測の基盤となってきたことなどが示されました。地震研と深い関係を持つ2つの学会の会長からは、学会事務局が地震研にあった頃の思い出や、地震研で過ごした大学院生時代の逸話もご紹介いただきました。

そして、地震研設立と同じ年に竣工し

た安田講堂で周年を祝うことは大学史を重ね合わせて考える絶好の契機だ、と津田敦理事が挨拶を述べて開会した記念講演会には、3名の皆さんが登場しました。

古村孝志先生の講演は、10周年に際して寺田寅彦先生が起草した銘文の精神が受け継がれていることの紹介から始まりました。所の歴史は言い換えれば観測装置開発の歴史でもあったこと、教員は当初の5人から72人に増えたこと、幾度も大震災を経験した日本の教訓を世界に発信する必要があることなどに触れ、次の100年では現象の理解を超えて災害の予測と軽減に歩を進めたいと語りました。

確率論と決定論の両方が必要

次にオンラインで登壇したのは、地震研究所教授を経てカリフォルニア工科大学教授として地震学の発展に大きく貢献してきた金森博雄先生です。過去の大地震データを示しながら、地震の理解には確率的なアプローチと決定論的なアプローチの両方が必要だと話し、地震予測の難しさを指摘。近年は観測とデータ活用の技術進展によってリア

会場では百周年記念誌（4部構成の第1部）や鯨&地球のステッカー、能登半島地震からの復興への願いをこめた能登ガラス文鎮などが土産に渡されました。

記念式典

開会挨拶 / 地震研究所長 古村孝志

式辞 / 総長 藤井輝夫

来賓祝辞 /

文部科学省研究振興局長 淵上孝
内閣府広域避難・計画推進室長 鎌原宜文
気象庁長官 野村竜一
日本地震学会会長 久家慶子
日本火山学会会長 中村美千彦

記念講演会

開会挨拶 / 理事 津田敦

記念講演 /

「地震研究所 100年、次の100年に向けて」

古村孝志①

「地球科学と災害軽減への役割」

カリフォルニア工科大学名誉教授 金森博雄②

「地震学に託す夢」作家 伊与原新③

司会 / 清水久芳（副所長・教授）

ルタイム地震学の分野が発展しており、研究者と市民の間のインタラクション、特に市民側から研究者側へのコミュニケーションがより重要になると述べました。

最後の登壇者は、『藍を継ぐ海』で第172回直木賞を受賞した伊与原新さん。本学理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程を修了し、富山大学で助教を務めた後に作家活動に入った伊与原さんは、作風そのままに科学と文学を架橋するような語りで会場を魅了しました（→右頁）。

講演会の後は山上会館に会場を移して祝賀会を開催。これまでの100年とこれからの100年に参加者一同が思いを巡らせました。今後も続く特別企画の内容は地震所の100周年記念サイトでご確認ください。→ www.eri.u-tokyo.ac.jp/100th/



地震研同窓会のご案内●地震研に在籍していた人全員が対象の同窓会が毎年10月に開催されています。未登録の人はこちらまで→ <https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dosokai/>





▲多くの登壇者が言及した、物理学者・寺田寅彦先生作の銘文@地震研1号館。B 地震研正門脇モニュメント。1983年にタイムカプセルに納められた研究所史や鯉文鎮などが、今回取り出されました。C 1928年から使われた地震研究所旧本館。地震研が弥生に移転した後は施設部や薬学部に利用され、1981年に取り壊されました。

記念講演3「地震学に託す夢」ダイジェスト

講演の題名は、研究現場の外にいる人が地震学という学問に託したい夢という意味です。私の小説を通じて科学に触れた皆さんの反応も含めてできた二つの夢について話します。

地震研の院生が登場する短編

私は地震研究所をモデルにした小説をいくつか書いていますが、地震学を一番正面から捉えたのは『八月の銀の雪』という短編集の表題作です*。コミュニケーションが苦手な男子大学生の主人公は、よく行くコンビニで外国人の女性店員に苛立っています。ある日、彼女は大事な論文のコピーを見なかったかと彼に聞きます。彼女が探していたのは、デンマークの地震学者インゲ・レーマンが書いた、地球の内核の存在を初めて示した論文でした。実は彼女は、地震研の大学院生だったんです。

この短編を書いたのは、編集者とのやりとりがきっかけです。私はかつて地磁気の研究をしており、取材で当時の話を聞かれると、地磁気は液体の金属が対流する外核で生成されて……と説明していました。あるとき編集者に、外核は液体だとなぜわかったのかと聞かれました。地震波を使えば内部構造がわかると説明すると、その編集者は大変驚き、感動してくれたんです。このとき、科学に携わる人には常識でも、そうでない人には感動につながるがあると気づきました。

もう一つのきっかけは、2019年にテキサス大学のグループが出した論文です。外核と内核の境界付近に液体の金属から析出した鉄の結晶が降り積もっているというモデルを提唱するもの。前から言われていたことですが、彼らはそれを雪が降り積もるという言い方で表現した。この表現は科学に疎い読者にも鮮烈なイメージを喚起します。地球の内部では銀色の雪が降っているかもしれないと話す、多くの人が感激し、科学が数式だけの世界ではないとわかってくれます。

リチャード・ドーキンス先生は、科学的説明は詩的感性を蝕むという信憑性のない決

まり文句に、いまだに多くの人々がだまされているという旨の言葉を残しています。地震学や地球科学は、こうした決まり文句を打ち破る可能性が最も高い分野でしょう。

寺田寅彦先生は「宇宙線」という随筆で、科学は不思議を殺すのではなく生み出すと書いています。世界は知れば知るほど新たな謎が出てきます。世界はそれほど広くて深くて豊か。慌ただしい日々なかでふと、いま地球の内部では銀色の雪が降っているかもしれないと想像できると、世界の見え方が変わったり、人生が豊かになったりすると思います。

世界を少しずつ広げている研究者の姿を書きたい、と私はよく言うてきました。それはまさに地震研の皆さんです。この世界をもっと広げ、センス・オブ・ワンダーを与え続けてくれること。それが私の二つ目の夢です。

理不尽を問いに変えるのが科学

二つ目の夢は、防災・減災に関するものです。私は長岡省吾さんという科学者に着想を得た小説「祈りの破片」を書きました。長岡さんは明治生まれの地質学者。広島文理科大学に勤めていた1945年8月6日、広島に原爆が投下されます。地質調査で山口にいた彼は、とんでもないことが起きたと知り、翌日広島へ。あまりの惨状に疲労し、神社の石灯笼の台座に座り込んだ彼は、針で刺すような痛みで飛び上がりました。花崗岩の表面が発泡して無数の棘ができていたのです。とんでもない爆弾が落ちたと直感した彼は、街を歩き回り、岩石や瓦の破片を拾い集めます。9月には政府が委員会を組織して現地調査に乗り出しますが、ずっと先に自発的に活動を進めていたのです。周囲の理解が得られず、ガラクタを集める変わり者と後ろ指を指されますが、信念を曲げませんでした。1955年、そのガラクタを礎に広島平和記念資料館が設置され、長岡さんは初代館長に就任します。

彼の思いを知ることはできませんが、私が想像したのは、被爆地の科学者として嘆きを

問いに変えたということ。理不尽を前に嘆くだけでなく、理性を振り絞り何が起きたのかを問いかけた。詩的な感情を問いに変えるのも科学なら、理不尽を問いに変えるのも科学。その問いに答えを見出せるのが科学者です。

数年前、小中学生と未来の防災社会や防災道具を自由に考えるワークショップがありました。津波を即座に感知してせり上がる防潮堤、地震発生と同時に浮き上がる建物、津波で流された人を見つけて助ける脳改造イルカ、ガチャのカプセルを開けると飛び出るベッド……。アイデアを縦横に語る子どもたちの顔は明るいものでした。

不思議を求める夢、防災・減災の夢は、どちらも好奇心が駆動します。子どものなかでは両者に区別がありません。大人と違い、子どもたちには、こんな世界を作りたい、未来を切り開くのは自分たちだという感覚があると感じます。若い力を地震学や地球科学の世界に引き込めれば未来は明るい。そんな確信につながる体験でした。

研究者よ、熱く専門を語れ!

科学の現場は厳しい状況にありますが、私は希望の兆しも感じます。最近、インターネットの動画サイトで研究者が専門分野を語るものが人気です。わかりやすさを無視して研究を語りまくる。研究者が面白がって話すこと自体が面白い。内容はわからずとも、研究者がこれだけ面白がるなら何か価値があるはず、と思う人が増えているのかもしれない。

研究者は冷徹な頭で科学を進めますが、その心には必ず熱いものがあるはず。その熱を惜しみなく表に出していただきたいのです。研究の外側にいる人間は、何よりそれを待ち望んでいます。私も微力ながら小説を通じて地震学や地球科学に貢献する道を模索することを約束します。

地震研100周年、おめでとうございます。



●QRコードから全文が読めます

*表題作「八月の銀の雪」は新潮社のサイトで全文が公開されています! → <https://www.shinchosha.co.jp/8gatsuginyuki/>

創立150周年記念事業

150人の集い
を開催 ~総長PRESENTS~ 2025

11月13日、「150人の集い2025」が六本木の国際文化会館にて開催されました。150周年を応援する150人委員の皆様と、総長をはじめとする学内構成員が、周年事業を盛り上げるための対話の場を設けるもので、開催は昨年につき2回目。東大出身の建築家たち^{*}が大名屋敷跡に設計した建物を舞台に催された集いを紹介します。



^{*}前川國男、坂倉準三、吉村順三の3氏（吉村氏は東京美術学校出身）

司会を務めたのは、俳優の菊川怜さんと落語家の春風亭昇吉さん。学生時代を振り返り、建築学科では徹夜で模型を作っていたという菊川さんに対し、経済学部では落語に十分集中できたと昇吉さんが応じ、いずれにせよ東大愛を高める機会にしようとして一致して会が始まりました。

最初に登壇した藤井輝夫総長は、先日定めたChallengers for Changesというスローガンに大学変革の決意をこめたと語り、150周年とその先の未来へ皆さんと向かいたいと挨拶。150人委員会の國部毅委員長は、目標額150億円を掲げる基盤基金UTokyo NEXT150を紹介し、学外から力強い支援をと呼びかけて乾杯しました。

歓談タイムを経て登壇した津田敦理事（150周年記念事業担当）は、「響存」を掲げて取り組む事業として、各種カウ

トダウンイベント、年史編纂、NHKとの連携による記念番組、150円特別メニューの提供などの企画を紹介しました。

そして始まったチャリティピッチは、150周年記念事業の3つの基金プロジェクトの代表者が順に活動を紹介し、会場の参加者が支援先・支援額を決めて投票するというもの。UTokyoインクルーシブ・キャンパス構築プロジェクトのチームでは、ジェンダー、地域、バリアフリー、国際と様々なテーマに取り組む若手構成員と伊藤たかね副学長が支援を募りました。UTokyo NEXT150のチームでは、外部資金を取れない研究こそ支援したいと菅野暁理事が語り、清酒「淡青」を手がける東大蔵元会会長も支援を呼びかけました。「ひらけ！赤門プロジェクト」のチームでは、赤門の重要さと改修プランの選択肢を人文社会系研究科の松田陽

准教授と芳賀京子教授が紹介しました。

続いてクイズ大会へ。百五十年史編纂室が考えた難問に正解し続けると三井淳平さん監修の赤門レゴをもらえるという趣向に、QuizKnockの伊沢拓司さんを含む来場者が挑戦。3人まで絞られた後、第4・第5問で全員が不正解となり、最後は赤門プロジェクトを応援する卒業生がじゃんけんで賞品をゲットしました。

その後は、オープンマイクのPRタイムを経て余興ライブを実施。東大在学時代からバンド活動を続けている若手職員が前座を務め、会場に居合わせたシンガーソングライターの加藤登紀子さんも素敵な歌声を披露してくれました。

チャリティピッチの投票結果発表では、赤門プロジェクトが僅差で勝者に。前回を上回る寄付額が記録されたことも伝えられ、会場は大きな拍手に包まれました。

| 超難問! 東大クイズ |

当日会場で出題され、名打のクイズプレイヤーをも翻弄した問題とその答えを紹介します（出題＝百五十年史編纂室）

第1問

東京大学の敷地面積の合計は、東京ディズニーランド何個分？

- ①約6個 ②約60個 ③約600個

第2問

東京大学のキャンパスは「三極構造」をとっているが、最も標高が高いのは？

- ①本郷 ②駒場 ③柏

第3問

東京大学の運動会の部で、初めて女性部員が入部したのは？

- ①弓術部 ②馬術部 ③バレーボール部

第4問

1885年、赤門が正式に東大の正門と位置づけられていますが、それまでの主な使い道は？

- ①まだ邸宅が残っていた前田家の人びとが出入りしていた
②附属病院へ出入りするための通用口
③史料編纂所への史料寄贈者の歓迎用

第5問

工学部の源流である工部省工学寮に、設立当初から存在した学科の名称は？

- ①造兵学科 ②造船学科 ③造家学科

第1問／東京ディズニーランドは約51㌔、東大は約3.26万㌔なので、正解は③（仮に演習林を除くと①が正解に） 第2問／柏は20m弱、本郷は20-23m、駒場は40m弱で、正解は②（本郷→台地という連想から①を選ぶ人が多数でした） 第3問／1951年に女性部員が入部した記録のある②が正解。 第4問／正解は②。現在と違い、以前の附属病院は心字池・育徳園の南方、赤門近くにありました。懐徳館があるエリアは前田家の敷地でしたが、道路から前田家の敷地へ至る入口は赤門とは別にありました。史料編纂所が東大に移管されたのは1889年。 第5問／正解は③。造家学はarchitectureの訳。現在の建築学科です。当初機械学科の一部だった造船学科は1882年に独立の学科に（現・システム創成学科）。造兵学科は1887年の設置（現・精密工学科）。

◎会場では百五十年史編纂室から「東京大学一五〇周年記念叢書」テーマ篇全44冊の構想が示されました。女性史、バリアフリー史、保育園史……乞うご期待！



第10回を迎えた物理を学ぶ女子学生のためのイベント

「やっぱり物理が好き!」を開催



11月8日、柏キャンパスで「やっぱり物理が好き! ~物理に進んだ女子学生・院生のキャリア～」が開催されました。物理を学びたい学部生や物理分野に進んだ大学院生へのキャリアパス提示を目的として毎年開催されているこのイベントも今年で10年目。カブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)、物性研究所、宇宙線研究所が主催したイベントの様相を紹介します。

先輩たちのキャリア選択

物性研究所の井手上敏也先生による開会挨拶で幕を開けたイベント。Kavli IPMU棟で行われた講演会で、最初に登場したのは、株式会社NGBで特許の権利化業務に従事している肉倉洋恵さん。工学系研究科物理工学専攻では、強磁性と強誘電性を併せ持つ「マルチフェロイクス」という物質を研究し博士号を取得。その後のキャリアやライフイベントなどについて悩んだ末に選んだのは、企業への就職だったとこれまでの道のりを語りました。知財の仕事では、技術を理解して正確に言葉にする力が求められること、そこに研究で培った論理的思考力や探求心が役に立つなど、理系のバックグラウンドを活かせる職種であることを紹介。「女性のキャリアは千差万別。とにかく周りとは比べない。やりたいことを決め、その選択を信じて目の前のことをコツコツ続けるのが非常に大事だと思います」と後輩たちにメッセージを送りました。

続いて講演したのは東北大学ニュートリノ科学研究センターの渡辺寛子先生。東北大学理学研究科の修士課程でニュートリノの到来方向を測定するための液体シンチレーターの開発に取り組んだこと、そこで世界最先端の研究に関わるというワクワク感を感じ始めたことなどについて述べました。修士課程修了後は就職活動もしましたが「ニュートリノ実験以上に心を動かされるものは見つからなかった」と話し、博士課程に進む決断に至っ

た背景を説明。また、子育てと仕事の両立や、岐阜県の神岡鉱山内で行っている反ニュートリノ検出器「カムランド」を用いた研究についても紹介。研究者の醍醐味は、自分の工夫次第で見たい物理に世界で最初に触れられることだと言い、「広い視野を持って何事にも挑戦し、楽しんでほしい」と参加者に語りかけました。

自然が問いに答えてくれる

休憩を挟み、参加者が3つの研究所を見学した後は、分子機能物質開発などを研究する物性研究所の森初果先生が講演。高校時代の授業で、透明なアルミナにクロムを入れると赤いルビーに、チタンや鉄を入れると青いサファイアになることを学び、物質の性質を知りたいとお茶の水大学の理学部化学科に進学したこと、大学院では電気伝導性を持つ有機物質の開発研究に取り組んだことなどこれまでの道のりを紹介。子供が小さかった時の苦労や有機機能性物質研究についても触れたうえで、「自然に問いを投げかけるといつも予想外の答えが返ってくる研究は、人智を超えている。大変なことも多いがとても楽しい。これから修士や博士課程で研究を楽しんでほしい」と学生たちにエールを送りました。

交流会の最後に閉会挨拶を述べたのは物性研究所の松田巖先生。「人生の岐路に立った時、先輩方が言っていたことを思い出してもらえれば」と参加者に語り、和やかな雰囲気の中イベントは終了しました。



①株式会社NGBの肉倉洋恵さん ②東北大学ニュートリノ科学研究センターの渡辺寛子先生 ③物性研究所の森初果先生 ④参加者は2グループに分かれてKavli IPMU、物性研究所、宇宙線研究所を見学しました。⑤3人の講演者を囲んでの交流会。お茶やお菓子とともに、将来の進路やライフイベントなどについて様々な意見が交わされました。



海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第41回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

高校生・大学生が切り拓く 奄美発の新航路とプラネタリーヘルス

大気海洋研究所
海洋地球システム研究系
教授

横山祐典



200名を超す多くの高校生が参加した2025年11月のシンポジウム

うがみんしょーらん（こんにちは）。毎年奄美市で開催している通称「奄美シンポジウム」も今年で4回目を迎えました。今回は奄美市の瀬戸内町で120年以上も前から施設を持つ東京大学医科学研究所と合同開催し、東大150周年記念事業の一環としての開催でもありました。テーマは「プラネタリーヘルス：医学と海洋科学研究が描く奄美発の新航路」。鹿児島県知事からビデオメッセージを受けたほか、産官学分野の登壇者の皆さんによる様々な研究発表がなされ、1週間の期間中、延べ400人以上の参加がある、大きな規模のものとなりました。

さて、今年のシンポジウムの主題に据えたプラネタリーヘルスという概念は、国連でSDGsが採択された2015年に医学雑誌『The Lancet』に提唱された、人類と地球の「健康」を総合的にとらえる考え方です。世はまさに人新世、1953年から現在にかけてはそれ以前の時代とは異なり、大気—海洋—固体地球—生命圏—雪氷圏などといった地球のサブシステム間の相互作用だけではなく、人間圏の影響が大きくなってきました。人間活動による環境変化の痕跡は、世界中の地層にもそのシグナルがくっきりと残っています。それらは結果として地球温暖化や海洋酸性化、生物多様性の喪失、そして公害などといったあらゆる変化をもたらしています。

今の高校生は、これらの顕在化してきた人新世特有の課題を日常の一部として経験することを余儀なくされる最初の世代です。彼らは極端気象による生活の不安定化や熱中症リスクの増大などによる身体的な側面だけでなく、そのような将来を生きるということ自体が大きな精神的負担となって、心理的な側面でも健康に影響が及びかねません。このように、身体的な側面に止まらず包括的に「健康」を認識するプラネタリーヘルスの枠組みは極めて重要です。

「海と希望の学校 in 奄美」の今年の生徒さんたちは第4期生。「海と希望の学校」では、そんな人新世を生きる奄美の高校生の探究学習サポートを行なってきました。シンポジウムでは高校生のポスターセッションを開催し、理系文系といった従来の枠にとらわれず、地下水や海水の化学的な研究のほかに、地方の空き家問題など、高校生の目線ととらえた地域課題についての探究学習内容の発表や議論を積極的にに行い、来場した大学の先生方に熱心に説明している姿はとても頼もしく感じられました。この先も高校生たちは最新の科学知識を積極的に吸収し、テクノロジーを活用しながら、地球の限界を踏まえた新しいライフスタイルを模索していってくれると期待を抱かせてくれました。

しかし、今後プラネタリーヘルスを推進するためには、この世代が抱く不安を軽減し、実践を後押しする社会的基盤が必要です。教育の充実、政策決定への参画機会の拡大、安心して挑戦できるコミュニティの形成などを通じて、彼らが受動的に過酷な人新世を耐える世代ではなく、能動的に持続可能な未来を共創する世代として成長できる環境を整えることこそが、社会全体の課題となっていくべきだと考えます。その上でも「海と希望の学校 in 奄美」の継続は奄美の12市町村をはじめ地域の「希望」でもあるのですが、現在のプロジェクトは2026年度で終了となります。その後になんとか継続できればと思っているのですが、もし妙案をお持ちの方がいらっしゃいましたら是非ご一報ください。ありがとうございました（ありがとうございました）。



第1回のシンポジウムのポスター（左）と今回のポスター（右）。協賛や後援の企業や組織（それぞれのポスターの下部）が多くなりました。



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

バックナンバー→www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



UTokyo 第41回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑤

医科学研究所
の巻



附属病院で看護師のサポート

医科学研究所管理課総務チーム所属のスタッフ、障害がある職員3名とコーディネーター1名が担当するのは、白金台キャンパスの医科学研究所附属病院内での支援業務です。不要書類のシュレッダー処理や病院で使用されるバインダー拭きなどの業務に加え、検査用具のセット作り、アルコール綿のカット、アメニティタオルの仕分け、大判ロールシーツの整理など、多岐にわたる支援を行っています。

「医療キットも作成しますが、日によって中身が異なることがあるので、見本を確認して作ってます」と話すのは吉田浩一郎さん。注射針などは太さが何種類もあるので、看護師の指示に従って作成しています。必要な仕事を見つけて能動的に動くようにしていると話すのは神代智永さん。「採血セットなどが少なくなってきた時には、補充しています」

午後は事務室に戻り、同窓会や教授会OB名簿の更新などのデータ入力、イベントや同窓会の発送作業などを行っています。「入社して今年で



左から：神代智永さん、島田大資さん、佐藤隆雄さん（コーディネーター）、吉田浩一郎さん。

14年目です。できる仕事も増えてきました。パソコンスキルも上がってきているので、新たな仕事にもチャレンジしたいです」と話すのは、5年前からパソコン教室に通いスキルアップに務めてきた島田大資さん。データ活用や文書作成の検定も取得しました。その能力を業務に活かし、毎月の業務分担表や会議用机配置図なども作成しています。郵便の仕分けも担当の一つ。100近くある郵便ポストの名前と位置は全部頭に入っていると吉田さん。隙間時間には、構内のポスター貼り、不要紙でのメモ帳作りなどを行う神代さん。様々な仕事に積極的に取り組んでいます。仕事が好きだと口をそろえる3人は2012年に入社した同期。今後も、全ての仕事に真摯に全力で取り組んでいきます。



左上から時計回り：病院で業務を行う神代さん、島田さん、吉田さん。



蔵出し! 文書館

The University
of Tokyo
Archives



第59回

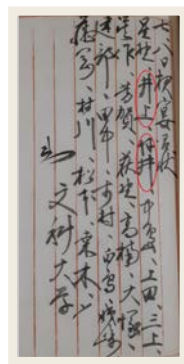
収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

坪井の謡本と文部省往復と

今から110年前の大正4（1915）年、大正天皇の即位礼にかかわる記念の催しが数々行われました。そのうち、12月7日と8日の2日間にわたって天覧能が催されました。初日は「翁」「高砂」「石橋」、2日目は「橋弁慶」「羽衣」「狸々乱」が、各流儀によって演じられることを、東京朝日新聞が事前に大々的に報じています。演目は、能の五番立てに基づく祝言性の高いものであったことがわかります。



当館の寄贈資料、文科大学教授 坪井九馬三関係資料に、筆で「大正四、十二、八日夜 恩賜謡曲本（橋弁慶、羽衣、狸々乱）」と新聞紙（大正4年10月31日付「時事新報」）に書かれ、それに包まれていた謡本があります（F0006/S06/SS05/0013）。表紙中央には菊の御紋、表紙全体は金糸銀糸で調えられたものです。本文第1丁には、演目と出演者の一覧を記載し、第2丁以降は、3演目の詞章と胡麻章（節をあらわす記号）を記した、まさに“この日”のために調製された謡本でした。



当館所蔵の、文部省と本学との往復文書「文部省往復大正四年」では、文部大臣官房秘書課長から12月2日に大学に届いた「宮中ニ於テ催サル、夜宴召状伝達方ノ件」に対する、本学の出席者を取りまとめた文書に、坪井や、同じく文科大学教授 井上〔哲次郎〕の名もありました（S0001/Mo141/0020）。井上の日記（「巽軒日記」）も当館に寄贈されており、同年12月8日には「夜、宮中の夜宴に赴き、能楽を陪観す」と記されていたのです（F0005/01/0023）。

当館所蔵の教員の個人資料と公文書で、110年前の出来事がここに共鳴し、あらためて資料の面白さを実感することとなりました。（学術専門職員 星野厚子）

ワタシのオシゴト 第235回

RELAY COLUMN

財務部契約課旅費チーム 主任 石田美里衣

公平かつ柔軟に、日々アップデート



娘が作ってくれた十二面体を飾っています

7月に異動してきて、初めての旅費・謝金業務に携わっています。おなじみ出張旅費システムの運用、外部委託業者との調整、部局から寄せられる問合せ対応、本部の謝金伝票等を担当していますが、本部だからと虎の巻があるわけではなく、規程や支給要領とらめっこで最適解を探します。文章の書きぶり一つで解釈や支給可否が変わってしまうので、周りに支えていただきながら勉強中です。鉄道や航空会社の運賃体系の変更や、多様化する構成員の働き方等に影響を受け、判断に迷うケースが次々出てくるので、都度運用を検討し更新していくことが難しくもあり、旅費の面白みでもあったと感じます。

家庭では二児の母。朝は娘たちにピアノを指導してから出勤、退勤後は走って学童と保育園お迎え、通院、習い事、学校の宿題、家事と夜まで休みなく働きます。夜は自身の楽器の練習と分刻みの生活ですが、最近は家族旅行が趣味に加わり、働くモチベーションになっています。



今年の夏休みはカナダへ行きました！

得意ワザ：人にぶつからずスッススッサと早歩き
 自分の性格：カタカナ用語が少し苦手
 次回執筆者のご指名：小金澤優太さん
 次回執筆者との関係：出納Tでの良き話し相手でした
 次回執筆者の紹介：家族思いの、頼れるしっかり者

デジタル万華鏡 第49回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

理学系研究所附属植物園 園長
理学系研究所教授

塚谷裕一

デジタル化された『御薬園草木図』

国文学研究資料館による「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のおかげで、植物園所蔵古典籍の多数がデジタル化されている。そのリストを見ると、『花段綱目』、『甘藷考』、『本草圖譜』などの超有名どころが多数並ぶ中に、『御薬園草木図』というものがある。御薬園とは、われらが理学系研究所附属植物園の、江戸時代における幕府直轄の前身である。これが面白い。

序文のくずし字について、本学先端研の稲見昌彦教授に助けをいただいて解説してみると、唐・南蛮の薬種を国産化すべく御薬園を中心に試験施策していくので、希望者は願い出るように、という案内のようだ。要は幕府発行になる薬種種苗カタログのようなものか。だが、不思議なことに図版は写実に徹していない。

アオギリの心皮の形は不自然に尖っているし配列がでたらめ。ゴーヤーの実は、あの凸凹がまるで平らな鱗のように描かれている。ヤマモモ、ハハコグサ、オオバコやミヤコグサなど多くの植物では、葉の全てあるいは一部が銅色に描かれている。神事で馴染みだったはずのサカキでさえ、葉の形が変。ヘクソカズラも葉の殆どが銅色に描かれているが、もっと面白いのは花の色が紫に描かれていて、芯が白いことだ。本当の花色は白で、芯とその周りが濃い紅だから、まるでネガポジ反転のようである。またミズヒキの葉を緑、クリーム色、紅の3色で色とりどりに描いた図さえある(画像)。

本書と同じ箱に入っていた『梅花正寫』は、2017年まで原本が行方不明とされていたほどで、まだ謎の多い

書と言えよう。こういった面白い書群に、デジタル化のお陰で学内外から気軽にアクセスできるようになったのは、とても喜ばしいことだ。今後の新しい発見が楽しみである。



海根と記されたミズヒキの図。配色が美しい。

https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/sci_bg_niji

インタープリターズ・第220回 バイブル

教養教育高度化機構 特任准教授
科学技術コミュニケーション部門

定松 淳

「反ワクチン」ではない検証は可能か

「科学と社会の架け橋」となれる人材を育成するというミッションでスタートした科学技術インタープリター養成プログラムも今年で21期生を迎えた。その1期生に、理学系研究科生物科学専攻で理学博士号を取得した後、映像制作会社のテレビマンユニオンに就職した修生がいる。その1期生、大西隼さんが企画・監督・ナレーション・プロデューサーを務める映画『ヒポクラテスの盲点』が、この10月に公開された。

日本政府の新型コロナワクチン接種政策の妥当性を問おうとする意欲作で、その主旨はいわゆる「反ワクチン」ではなく、あれだけ大規模に展開された政策を「きちんと検証しませんか」ということであると思う。この映画が取り上げているテーマを私なりにまとめると3つ、①コロナワクチン接種後に多くの重篤な副反応が発生しているけれども、被害者救済制度でもあまり救済されず、社会的な関心も低調であるということ、②その背景でもあるが、2021年以降日本社会においてワクチン接種を推奨するキャンペーンが政府によって展開され、マスコミによっても後押しされていたこと、③その背後で、mRNAワクチンの問題点が把握されていたはずなのに、政策に反映されず、国民規模での接種が継続されてきたこと、である。

映画の中心は、2023年9月に発足した一般社団法人「ワクチン問題研究会」、特にその代表である福島雅典氏の活動についてのドキュメンタリーである（福島氏は京都大学名誉教授で再生医療研究の権威でもある）。同時に、コロナワクチン接種政策に関与してきた長崎大学の森内浩幸氏もインタビューに応じている。森内氏も認めているコロナワクチンのネガティブな影響として、若年男性における心筋炎・心膜炎の有意な増加があり、それは日本の3回目ブースター接種の前には判明していたという（JAMA誌 326(14): p.1396）。

当時を振り返ると、オミクロン株の拡大が始まり、菅内閣と比して岸田内閣のワクチン政策はもたまたししていると批判されていた時期である。現実にはブレーキをかけるのが難しい状況であったことは理解できる。だからといって事後的な検証を排除していいということにはならないだろう。一方で政府や製薬会社が、訴訟→賠償という展開を恐れていることは十分に想像できる。「真実和解委員会」のような枠組みが必要なのかもしれない。

科学技術インタープリター養成プログラム
<https://scicom.c.u-tokyo.ac.jp/program-2>

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第74回

ディベロップメントオフィス
卒業生ユニット長

堺 飛鳥

広がる卒業生の力、同窓会

東京大学の卒業生のみなさまは、さまざまな場面で活躍し、今も大学と社会をつなぐ大切な存在です。卒業生ユニットでは、そうした卒業生とのつながりをより身近に感じていただけるよう、全国の同窓会に伺い交流を深めています。実際にお会いすると、「大学のいまを知りたい」「母校の力になれば」という声をいただくことが多く、私たちも励まされています。今年10月のホームカミングデーでは同窓会企画が昨年より大きく増え、「母校で集りたい」という思いの広がりを実感しました。卒業生の帰属意識も着実に高まっているように感じます。

現在、大学に登録されている同窓会は321団体にのぼりますが、ゼミ・研究室単位の会や旧学科名のまま続く会など、大学がまだ把握できていない会も多くあります。卒業生ユニットでは、こうしたつながりを掘り起こし、大学との関係づくりをお手伝いしています。小さな集まりでも、それが卒業生にとってかけがえのない居場所であり、大学につながる大切な窓口となるからです。

そのため今年度、各部署の皆さまに「同窓会の実態等に係る基本調査」へのご協力をお願いしています。もし身近に未把握の同窓会をご存じでしたら、ぜひ情報をご提供ください。その一つ一つが、大学と卒業生を結び直す貴重な手がかりとなります。

卒業生のエンゲージメント向上は、交流の活性化にとどまらず、大学の教育・研究を支える力にもつながります。大学の近況に触れ、親しみが深まるほど、「何か力になれば」というお気持ちや、寄付や学生支援、行事協力など多様な形で広がっていきます。

卒業生ユニットは、これからも現場での対話や同窓会の掘り起こしを通じて、温かいつながりを育ててまいります。この動きを、卒業生はもちろん、教職員や在学生も含めた“オール東大”でともに盛り上げていければと思います。



8月に新設された「静岡銀杏会」総会に
津田敦理事・副学長と参加

東京大学の同窓会→



トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
11月11日	柏地区共通事務センター	東京大学柏キャンパス一般公開2025を開催
11月11日	新領域創成科学研究科	フュージョンエネルギー学際研究センター開設記念式典を開催
11月11日	広報室	ゲームを裏で制御するAIは現実のスマートシティをも司る? = 三宅陽一郎 「人狼」をプレイする人工知能とは? = 鳥海不二夫 ゲームをプレイしながら聞く特殊な音楽体験を考える = 山上揚平 ボードゲームからビジネスまで、多分野で有用なゲーム理論 = 野田俊也 生活に支障をきたすほど没頭してしまうゲーム依存 = 大野志郎 / 広報誌『淡青』51号
11月13日	未来ビジョン研究センター	Global Commons Forum 2025 を開催
11月13日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生修学旅行を開催
11月14日	工学系研究科・工学部	田中 知 名誉教授が令和7年秋叙勲 瑞宝重光章を受章
11月17日	医科学研究所	「第31回東アジアシンポジウム」へ参加
11月19日	コミュニケーション戦略本部	教員の逮捕について
11月24日	コミュニケーション戦略本部	本学教員の逮捕を受けて (総長メッセージ)
11月25日	本部学生支援課	東京大学運動会140周年カウントダウンイベントを実施!
12月1日	附属図書館	観世宗家伝来『風姿花伝』がユネスコ「世界の記憶」国内候補に決定
12月2日	本部奨学厚生課 本部渉外課	「さつき会奨学金」大幅拡充で女子比率向上と地方からの挑戦を後押し
12月3日	コミュニケーション戦略本部	15人の東大研究者がClarivate HCRに選出
12月3日	新領域創成科学研究科	「電気自動車の振動計測制御に関する社会連携講座」の成果発表会を開催
12月4日	情報理工学系研究科、工学系研究科・工学部	MITテクノロジーレビューによるU35イノベーター日本版に選出!
12月4日	ジェンダー・エクイティ推進オフィス	30% Club 9大学トップが「DEI推進共同メッセージ」を発表
12月5日	東洋文化研究所	東洋文化研究所の蔵本龍介教授が地域研究コンソーシアム賞研究作品賞受賞
12月5日	情報理工学系研究科	【開催報告】 IST Grand Gathering 2025

CLOSE UP 柏キャンパス一般公開2025 を開催

(柏地区共通事務センター)



上/大気海洋研究所のバルーンアート。左/水文シミュレーションに興味津々の子どもたち (生産技術研究所)。右/スパコンを見学するチーバくん (情報基盤センター)。

「柏キャンパス一般公開2025—未来を創る、柏の知—」が、10月24日、25日の両日、柏キャンパス及び柏IIキャンパスにて開催されました。本イベントには、柏地区の新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所、大気海洋研究所、カブリ数物連携宇宙研究機構、空間情報科学研究センター、生産技術研究所、情報基盤センター、柏図書館、環境安全研究センター柏支所、文書館、グローバル教育センター柏支部、モビリティ・イノベーション

連携研究機構、産学官民連携棟が参加しました。日頃の研究成果を紹介するため、お楽しみも楽しめる体験コーナー、研究教育の粋を集めた展示、特別講演会など工夫を凝らしたトークイベント、さらに普段は立ち入ることのできない研究室や大型実験施設をめぐるガイドツアーなど、多彩な催しが行われました。時雨にけぶるあいにくの空模様にも関わらず、柏キャンパス及び柏IIキャンパスには2日間で8,800名を超える方々にご来場いただきました。地域に開かれた柏地区キャンパスの一般公開は大盛況のうちに幕を閉じました。

UTokyo 新年の食卓をちょっと特別な彩を

帰省や家族が集まる新年の食卓に、ちょっと特別なアクセントを加えてみませんか? 「貝象嵌箸置き5点セット」は、東京大学を象徴する銀杏や赤門、安田講堂がさりげなくデザインされた箸置きです。アワビ貝のきらめきとウォールナットの温かい風合いが、食卓をやさしく華やかにしてくれます。ご自宅用にも、帰省時の手土産にもおすすめの逸品です。(田)



6,000円
(税込み)

貝象嵌箸置き
(5個セット)

UTCCから
のお知らせ



→オンラインストア



CLOSE UP 東京大学運動会140周年カウントダウンイベントを実施! (学生支援課)



↑ 応援部による特別演舞。
← 「東京大学スポーツコンパス」のロゴマークが完成し展示されました。

第24回ホームカミングデーで、東京大学運動会140周年カウントダウンイベント「つなぐ140年、つながる未来へ」が伊藤謝恩ホールにて開催されました。イベントでは、まず運動会理事長の出口敦教授の開会の挨拶から始まり、特別記念講演は2つ行われ、運動会の過去として「東京大学の運動部の歴史」について中西啓太准教授（ハンドボール部部长）よりお話がありました。記念講演の二つ目には運動会の未来として「スポーツサイエンス」に関して野崎大地教授（漕艇部部长）から講演が行われました。また、140周年に向けての東京大学運動会の取り組みが紹介さ

れ、藤井輝夫総長にも参加いただき「東京大学スポーツコンパス」について触れながら学生たちへエールが送られ、東京大学150周年を控える中で、関係者・卒業生とともに運動会140周年の成功と今後の発展に向けて取り組んでいく思いが語られました。締めくくりには、応援部による力強い特別演舞が披露され、応援部員の「東京大学のスクールカラーにちなんで、みんなで東大スポーツの“青”写真を描きましょう!」という声掛けに会場全体が熱気に包まれました。卒業生や在学生在が一体となって拍手や歓声を送り、未来への期待と誇りを共有する場となりました。



CLOSE UP 同窓生・学生交流のIST Grand Gathering を開催 (情報理工学系研究科)



↑ イベント参加者一同の集合写真。
← 研究科のゆるキャラISTyくん (UTCCでぬいぐるみ販売中)。

11月14日、弥生講堂アネックス セイホクギャラリーにて、学生と同窓生が一堂に会する交流イベント「IST Grand Gathering 2025」を開催しました。4回目となる今回は、同窓生18名を含めて過去最多の80名超の参加者が集まりました。

中村宏研究科長の開会挨拶に続き、前半では本研究科同窓生3名と教員による講演セッションが行われました。後半の交流会では「名札交換ゲーム」を行い、登壇者や同窓生と学生たちがキャリアに関するアドバイスや経験談を共有しました。終盤には研究科のゆる

キャラISTyくんをデザインした五十嵐健夫先生から創作にまつわるお話があり、最後に宮尾祐介副研究科長が挨拶しました。分野や世代を超えた新たなネットワークが生まれる中、盛況のうちに幕を閉じました。

なお、本イベントは、情報理工学の創造的展開プロジェクトの卓越RA (リサーチ・アシスタント) の学生9名による主体的活動によるものです。企画・運営は浅野真輝さんとXU Yutingさんが中心になり、柚木隼人さんが開催報告記事作成を、WAKCHAURE Manasさんが動画編集を実施しました。



CLOSE UP Global Commons Forum 2025 を開催 (未来ビジョン研究センター)



左/オンラインで特別講演を行ったJohan Rockström教授。右/最終セッションでは福士謙介センター長の司会のもと、学生と総長がディスカッションを行いました。

10月7日、東京大学グローバル・commons・センター (CGC) は、「グローバル・commons・フォーラム 2025」を、弥生講堂一条ホール/オンラインのハイブリッド形式で理化学研究所とともに開催しました。会場とオンライン合わせて約600名の参加がありました。

本フォーラムでは“Safeguarding Global Commons through Transition to Nature Positive Economy”をテーマとし、グローバル・commonsの保全のための新たな経済システムに向けた具体的な道筋の提示に取り組

みました。特に、自然資本の評価と経済システムへの統合をめざした「ネイチャー・オン・ザ・バランスシート」イニシアティブの紹介、企業における最新の取り組みとともに、社会実装に向けた議論が行われました。理化学研究所の五神真理理事長、CGCの石井菜穂子ダイレクター、Thomas Crowther教授 (Restor)、Dominic Waughray氏 (WBCSD)、Johan Rockström教授 (ポツダム気候影響研究所) ほか、多くの皆さんが登壇し、最終セッションには藤井輝夫総長も参加しました。



CLOSE UP フュージョンエネルギーのセンター開設式典を開催 (新領域創成科学研究科)



産官学の幅広い層から約70名にご参加いただき、本センターへのご期待を強く受け止める機会となりました。

10月9日、新領域創成科学研究科附属フュージョンエネルギー学際研究センターの開設記念式典を山上会館にて開催しました。フュージョンエネルギー (核融合エネルギー) という未来を切り拓く革新的テクノロジーの実現に向け、学際的な視点に基づく研究・開発・人材育成を行う中核拠点として、2025年4月に設立された本センターでは、フュージョンエネルギーの社会実装を見据え、設計や技術開発、制度整備、国際連携を視野に入

れた活動を展開しています。

式典では、自然科学研究機構核融合科学研究所の山田弘司所長、量子科学技術研究開発機構の竹永秀信副理事からご講演をいただき、本学の藤井輝夫総長によるビデオメッセージの上映、文部科学省の澤田和宏研究開発戦略官による基調講演、江尻晶センター長による活動内容紹介、センター所属教員による本学のフュージョンエネルギー研究とセンター各部門の紹介などが行われました。



高校生に学ぶ教育改革を

読者の皆様は、本学に教育学部附属中等教育学校があることを果たしてご存じだろうか。1年生から6年生まで合計720名の中学生・高校生が日々学んでいる。私は1年前に学校長に着任し、そのカリキュラムに圧倒された。象徴的なのが、6年生（高3）で全員必修となる16,000字以上の卒業研究だ。彼らは高3の夏まで、受験勉強そっちのけでこの執筆に没頭する。

圧巻なのはそのテーマだ。「愚痴の生産性」「ヤマトシロアリの穿孔活動」「ぬいぐるみペンケースのデザイン」「ウクライナ侵攻における演説の影響」「マイノリティに対する無意識の偏見」「恋愛要素によらない面白い小説」「子どもアドボカシー」「高校生にとってのメイク」「中高生のうつ病」「東大附属のジェンダーバイアス」「現代における物々交換の価値」などなど。文理の枠を超え、個々の「不思議」や「違和感」「興味」を、文献購読

やインタビューを通じて徹底的に言語化していくのが附属流だ。

彼らの姿は、成果を急ぐがあまり既存の学問作法に縛られ、ともすると「問い」そのものを見失いがちな私たち研究者の心に鋭く刺さる。

これまで高大連携といえば、附属生が大学から学ぶ機会ばかりが模索されてきた。しかし真に必要な改革は逆ではないか、と敢えて言ってみよう。学部生・大学院生こそが、彼らの伸びやかな探究心・知的好奇心に触れ、自身の研究を「初志」に戻って再検討する。そうした「学びの還流」の場を作ることこそが、高等教育改革の鍵の一つになりえるように思われる。

小国喜弘
(教育学研究科)



旧制東京高等学校尋常科を前身として1948年に創立された東京大学教育学部附属中等教育学校の校舎（中野区南台）